

式辞

皆さん、ご卒業おめでとうございます。今この歴史ある武蔵学園大講堂で式典に参加してらっしゃる皆さんにも、感染防止のためオンラインでこの卒業式をご覧になっている卒業生やご父母の皆様、関係者の方々にも、心からおめでとうと申し上げます。

この大講堂は、日本最初の私立七年制高校である旧制武蔵高等学校の一期生の卒業式に向けて、一九二八年、昭和三年に建設されました。今年で築九三年になります。設計は日比谷公会堂や早稲田大学の大隈講堂、群馬県庁などを手がけた佐藤巧一によるもので、練馬区に現存する最も古い鉄筋コンクリートの建造物である大学三号館とともに、練馬区登録文化材に指定されています。

皆さんから見て右前方の壁面上には、旧制高等学校初代校長の一木喜徳郎の肖像画があります。そこから右回りに旧制高校の歴代校長、大学開学後の歴代学園長の肖像画が飾られています。近い将来、昨年の一二月に亡くなられた有馬朗人学園長の肖像画が加わることになると思います。いずれにせよ、これらの肖像画は、来年、創立一〇〇周年を迎える武蔵学園の教育の歴史と伝統を物語っているように思います。

昨年度は、新型コロナウイルス感染防止のために、この大講堂で卒業式を行うことができず、オンラインで卒業生の皆様へのメッセージをお送りしました。ぜひこの大講堂で卒業式を体験したいという方々の希望もあり、昨年九月に、九月卒業の学生と既に三月に卒業した方々との合同卒業式を行いました。皆さんも、この一年間、ほぼすべての授業がオンラインとなるなど、様々な試練を経てこの式を迎えられていると思います。

千川通りや学内の桜の開花も進むなか、来賓として父母の会会長の松澤貴様にもご列席いただき、こうして皆さんと対面して共に卒業式ならびに大学院学位授与式を挙行できますことは、昨年来の体験を思い返すと、教職員一同にとっても、例年

にない大きな喜びであります。

さて、今年、大学院を修了される方は、経済学研究科博士前期課程六名、人文科学研究科、博士後期課程一名、博士前期課程九名です。また、学部の卒業生は、経済学部五三三名、人文学部三四九名、社会学部二八五名で、計一一六七名です。

大学院で修士号を取得された皆さんは、修士論文執筆時の苦しみと書き上げた時の達成感を思い起こして、それぞれの専門的な知識を生かし、新しい世界でご活躍なさることを大いに期待しています。

以後、この式辞は、学部卒業生の皆さんを対象としてお話をさせていただきます。大学院修了生の方々は、自らの立場に置き換えて、お聞き下さるようお願い致します。

今、時代は大きな歴史的変革期にあります。日本政府はこれを「Society5.0」という未来社会として提唱しています。つまり、人類の歴史を5段階に分け、Society1.0が狩猟社会、2.0が農耕社会、3.0が工業社会、4.0が情報社会。そして情報社会の延長線上に、これまでにない新しい社会が来るということです。それは人と様々な「モノ」がインターネットでつながり、それを人工知能、すなわちAIが制御する「超スマート社会」であるされています。確かに、こうした技術革新による、グローバル化と情報化とAIを基軸とした新しい時代の到来、そしてそれによる生活の大きな変化は確実に進行していくと、私も思います。

しかし、この一〇年を振り返ってみても、二〇一一年に起きた東日本大震災は、福島原発事故を含め、今の人知では対応できない大きなリスクが存在することを私たちに教えてくれました。その後も、毎年のように「異常気象」と呼ばれる台風被害や集中豪雨による災害、熊本や北海道での地震災害などが頻発しています。さらに、今回の新型コロナウイルスのように、直ぐには対応できない感染症の発生も、エボラやサースなど繰り返し起こっています。

Society5.0と描かれる科学技術が先導する豊かな未来図と、地震の津波によって

街が押し流される映像や今回の新型コロナウイルスパンニックともいうべき現実との間には、とても大きな乖離があるように思います。ではこうした混沌とした時代にあって、皆さんは何を頼りに、これからの人生を歩んでいけば良いのでしょうか。

皆さんのご卒業にあたり、四年前の入学式で、故有馬学園長や私がお話した、本学の母体である旧制武蔵高等学校の建学の三理想と、武蔵大学の教育の基本方針について改めてお話したいと思います。

旧制武蔵高等学校の建学の三理想とは、第一に、「東西文化の融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」。第二に、「世界に雄飛することができる人物」。そして、第三に、「自ら調べ自ら考えることのできる人物」。そうした人物を育てることが教育の目的とされていました。東西文化融合や世界雄飛は、今風に言えば「グローバル人材の育成」ということでしょう。「自ら調べ自ら考える」、つまり「自調自考」は、「アクティブ・ラーニング」と言い換えることもできるでしょう。今から一〇〇年近く前に作られたこの三理想は、現在でも立派に通用する内容であり、本学園の建学の精神をあらわしています。この三理想は、旧制高校から新制大学に変わっても、ずっと受け継がれてきましたし、今も本学の教育の原点であることに変わりはありません。

今から十五年前、二〇〇六年に、武蔵大学はこの三理想をもとにして「知と実践の融合」という新たな教育の基本目標を定めました。

「知と実践の融合」は、「自立、対話、実践」という二つの言葉に濃縮されています。

最初の「自立」とは、建学の三理想の一つ、「自調自考」の精神であり、「自ら調べ自ら考える」ことです。皆さんは、ゼミナールを始めとする武蔵大学の少人数教育の中で、また卒業論文やゼミ論文を書く中で、この自調自考、自ら調べ自ら考える態度をしっかりと身につけてこられたと思います。

二つめの「対話」とは、「心を開いて対話する」、つまり、相手を自分と同じ人間として認め、どのような生まれの人であろうとも偏見を持つことなく、差別するこ

となく、対等な立場で話しあうことです。また、相手の痛みを自分の痛みとして、ともに分かち合い、相手の喜びを自分の喜びとして、ともに共感しあうことでもあります。出自の異なる人や自分と意見や趣味の合わない人とも、多様性を認め合い、共に支え合って生きていくことのできる対話力、共感力が大切です。

そして三つ目の「実践」とは、「世界に思いをめぐらし、身近な場所で実践することです。英語では「Think Globally, Act Locally」です。「Think Globally, 地球規模で物事を考え、Act Locally 今、あなたが生きている場所で実践しなさい」という意味です。私たちが毎日飲んでいる水も、酸性雨をはじめとした地球規模の環境汚染と深くつながっています。今、皆さんが着ている服も、おそらくアジアのどこかで作られたものでしょうし、毎日の食材も多くは海外から輸入されたものだと思います。そしてまさに、今、私たちが直面している新型コロナウイルスも、グローバルかつローカルな問題です。

私たちが、二十一世紀社会を生きるということは、いやおうなく、世界とつながらざるを得ないということです。皆さん一人一人の個人的な生活が、実は地球規模の問題と直接的に関わっているということを、常に忘れないで頂きたいと思います。

武蔵学園は、冒頭にも申し上げたように来年、二〇二二年に創立百周年を迎えます。これに向けて、二〇一四年に根津公一理事長が「まなざしを世界に向け、二十世紀の課題を担う国際人を育てる」というドクトリンを示されました。同年秋には故有馬朗人先生の「学園長プラン」が公表され、「学園創立百周年を目標に、大学・高中とも、〈世界に開かれたリベラルアーツの学園〉となることをめざす」とされました。これらをもとに、大学でも新しい中期計画を定め、「異文化を理解し、未来を創造する教養あるグローバル市民の育成」を目標にその実現に取り組んでいます。

ここで言う「教養あるグローバル市民」とは、今までにお話してきた、「知と実践の融合」を体現しようとする人のことです。武蔵大学の国際化とは、単に語学に堪

能であるとか、海外で活躍できる人材を育てるという意味だけではありません。それは、「自立、対話、実践」という本学の教育の基本目標を具現できる人物の育成に他なりません。

武蔵大学の直近のグローバル化推進に関しては、今年度は、経済学部「ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム」の二期生、四名がロンドン大学の学位を取得されました。おめでとうございます。今後のご活躍を期待しています。また、二期生のうちお二人と、今年が卒業年にあたる三期生の十数名が、五月の最終試験にチャレンジされると聞いています。全員がロンドン大学の学位を取得できますよう心より願っています。

人文学部と社会学部では、それぞれ四年前にスタートしたグローバル・スタディーズコースとグローバル・データサイエンスコースで、今年、一期生が卒業します。各自の学びの個性を生かして、社会人としてご活躍されることを期待しています。

武蔵大学のOB・OGの中にも、「グローバル市民」として活躍している方がたくさんいらっしゃいます。こうしたグローバル市民の一例として、ここ数年、卒業式で、一九八六年に経営学科を卒業された三十四回生の角田寛和さん、通称「ちょんまげ隊ツン隊長」の活動を紹介してきてきました。今年も簡単に触れますと、千葉県サッカーフリークの靴屋さんが、東日本大震災直後の報道で、避難所の子供達が裸足だということに気づき、店の倉庫にある靴を車に満載にして被災地に届け、被災地の子供たちとの交流が始まります。その交流の中から、ツンさんは、二つのことを思い立ちます。一つは、サッカーを通して被災地の子供達を元気づけようということ。もう一つはマスメディアが伝えない現地の日常を、全国の支援者や世界の支援者に、感謝の気持ちとともに、伝えようという活動でした。その活動報告は、日本各地、世界各地で十年間継続して二〇〇回以上にわたって続けられています。二〇一四年のワールドカップでは、牡鹿中学校の子供たちをブラジルに連れて

行きソーラン節を披露していますし、翌二〇一五年のネパール大地震のおりには、政府の支援の行き届かない山岳地帯に物資を運びながら、ネパールの子供達に東北の復興の様子を伝えるなどの活動をしていらっしゃいます。このネパールへの支援は、地震後、毎年二、三回のペースで、ボランティアの学生たちとともに衣類を運ぶなどして今も継続的に続けられていますし、武蔵の学生も参加しています。

またツンさんは、二〇一六年に「MARCH」という映画を制作されました。これは、全国各地に疎開を余儀なくされていた被災地の小中学生を再結集して作られたマーチングバンドを主題としたドキュメンタリーです。この「MARCH」は、二〇一八年、ロンドンのドキュメンタリー映画祭でグランプリを受賞していて、本学でも何度か上映されています。

ツンさんは、「子供達に靴を」、「子供達と共にサッカーを」、という思いから出発して、現地での交流を通して、様々な復興支援や障害者支援のプログラムを開発していきます。まさに自調自考の体现です。復興の状況をネパールなど世界各地で、通訳を通して伝え、現地の人々と交流していく姿勢は「心を開いて対話する」ことに他なりません。そして、そうした活動全体が、被災地と世界をつなぐ「実践」となっています。

ツンさんだけでなく、各界で、多くの先輩達が活躍しています。例えば、古典芸能の世界では、落語家の三遊亭好の助師匠、講談では昨年真打となられた六代目神田伯山さん、女流講師として活躍している一龍斎貞鏡さんなど多士済々です。こうした卒業生の紹介も含め、来年度開設予定の国際教養学部を紹介などを内容としたAERAのムック本「武蔵大学」が、今年の六月に刊行予定です。ぜひ、お読み頂きたいと思います。

ところで、新型コロナウイルスの感染者数は世界では一億二千万人を超え、死者も二七〇万人に達しています。日本でも緊急事態宣言が解除されたとはいえ、国際的な人の移動という点ではほぼ鎖国状態にあって、オリンピックを開催できたとしても海外からの一般観客の受け入れは断念したという報道もなされました。一見、グローバル化は急速に衰え、孤立主義が台頭しているように見えます。しかし、世

界的な歴史家ユヴァル・ノア・ハラリ氏の説くように、「真の安全確保は、信頼のける科学的情報の共有と、グローバルな団結によって」しか達成することはできません。そのためには、人間同士の、また国家間の信頼と連帯が不可欠であり、今こそ真のグローバル化が問われています。皆さんもこのことを十分に自覚して、コロナ禍をたくましく生き抜いて頂きたいと思います

皆さんは、四月には学生から同窓生へと立場が変わりますが、今後武蔵ファミリーの一員であることには変わりはありません。武蔵大学卒業の第六十九回生として、学友との友情の絆をこれからも大切にしていって下さい。

武蔵大学は、経済学部経済学科の単科大学として、一期生六八名という、とても小さな大学としてスタートしました。その後、経営学科を増設し、人文学部、社会学部を作り、今では、毎年千人余りの卒業生を社会に送り出しています。それでも卒業生の総数は、現在、皆さんも含めてようやく五万人を超えたところで、一つのマンモス大学の学生数にもおよびません。しかし、だからこそ、卒業生たちの結束には、格別のものがあります。これからは、武蔵大学同窓会の一員として、同窓会の先輩諸氏との交流の輪を新たに作り出して下さい。特に、地方で勤務することになる場合には、各道府県同窓会に加入して、その地域での人脈を広げて頂きたいと思います。信頼できる先輩たちが、必ず皆さんを応援してくれます。ぜひ、皆さんから先輩たちに「私は武蔵の卒業生です」と声をかけて下さい。

さらにまた、私たち教職員や後輩たちのことも忘れることなく、これからも機会があれば、気軽に江古田のキャンパスや朝霞のグラウンドを訪れてください。

「自立、対話、実践」の精神を忘れることなく、伝統ある武蔵大学の卒業生であることに誇りを持ち、皆さんの輝かしい未来にむかって元気に進んで行って下さい。

最後に改めて、皆さん、ご卒業おめでとうございます。

以上をもって、私からの卒業生へのメッセージと致します。

令和三年三月二十二日

武蔵大学長 山寄哲哉